

# 松下国際財団 研究助成 研究報告

## 【氏名】

南後 由和

## 【所属】（助成決定時）

東京大学大学院学際情報学府・博士課程

## 【研究題目】

戦後日本建築界の国際化に関する研究——建築ジャーナリズムの分析を中心に

## 【研究の目的】

本研究は、建築ジャーナリズムの系譜の整理を重点的に行い、戦後日本建築界が、戦後復興、東京オリンピック、大阪万博などのナショナル・イヴェントにおいて、いかに欧米の建築界との関係を取り結び、いかに国際的地位を獲得していったのかを明らかにすることを目的とした。

研究対象とする時代区分は、職能の確立が目指された戦後の建築運動から、前衛としての建築家の役割を失墜した大阪万博を経た 1970 年代の建築界までである。具体的には、建築専門誌は、『建築雑誌』、『国際建築』、『新建築』、『建築文化』、『建築』、『SD』などを、編集者は、これらの雑誌の編集・企画に従事した川添登、宮内嘉久、平良敬一などを分析対象とした。

研究遂行の際、欧米における建築家の社会的位置を日本の文脈に直接敷衍することには留意しなければならない。そこで合わせて、日本と欧米における建築家の社会的位置の比較をし、日本の建築家を取りまく建築士制度、建築運動の展開をめぐる考察を、建築ジャーナリズムの系譜の分析と連動させた。

## 【研究の内容・方法】

### 1. 「建築界」の存立様態

H.S.ベッカーの「芸術界」や P.ブルデューの「場」の概念など、芸術・技術社会学における理論的蓄積を検討した。それを踏まえ、設計、構造、設備、施工などに関わる生産者による集団制作の次元のみならず、歴史家、批評家、編集者、施主などによって構築、維持される「建築界」の存立様態を明示した。

### 2. 建築ジャーナリズムと建築家の職能運動および海外の建築動向との関係

1. で明らかにした「建築界」の駆動装置および読者共同体を生む場として、建築雑誌を捉え返した。新日本建築家集団（NAU）、例の会、五期会、メタボリズムに代表される建築運動および機関誌の展開と、民間出版社の刊行による建築雑誌との関係性を考察した。なかでも、1950 年の建築士法制定にともない、「建築士」との差異化を図るため、作家・芸術家としての「建築家」像を打ち出す建築雑誌の文化戦略を軸に据えた。また、ル・コルビュジエやヴァルター・グロピウスが牽引した CIAM（近代建築国際会議）やアメリカによる日本建築界の承認という回路、1960 年の東京での世界デザイン会議において建築家が世界に向けてアピールした功績、その後のニューヨーク近代美術館での展覧会展出などの動向を考察した。

### 3. 日本人建築家の国際的地位に関する事例分析

丹下健三、磯崎新、黒川紀章の有名性および建築ジャーナリズムにおける表象に関するこれまでの研究成果を土台に、戦後の「広島平和公園」（1950 年）、「伝統論争」、「東京オリンピック」（1964 年）、「大阪万博」（1970 年）に至る、日本的なるものに関する論争やナショナル・イヴェントの考察へと分析対象を拓いた。また、丹下の CIAM への参加、磯崎の国際展への出展、黒川、菊竹清訓、槇文彦らのメタボリズムなどを中心に、海外の建築ジャーナリズムにおける批評や評価軸を 2. の研究内容と連動させて検討した。

## 【結論・考察】

1. これまで編集者などの文化的仲介者の営為は等閑視されてきたが、特集テーマを組み、掲載作品を選別するなど、建築界を方向づけるうえで、編集者が果たす役割は透明でないことが明らかとなった。また、特定の建築雑誌に関する先行研究は散見されるが、専門誌相互を総体的に位置づけた研究は蓄積されてこなかった。それゆえ、本研究は、建築ジャーナリズム研究の体系化へ向けた重要な布石ともなった。

2. 建築史の分野では、建築家を中心に据えて、意匠、様式、思想の変遷や職能のあるべき姿が語られる傾向にある。それに対して、本研究は、建築家の社会的・国際的地位、ジャーナリズムにおける表象を分析することにより、建築史を芸術社会学、メディア論を横断しながら社会学的に解体しようとした。そのことにより、専門分野の違いを自明のものとした棲み分けを乗り越え、建築史と社会学を架橋する研究領域の開拓への手がかりを得た。